

# 株式会社三菱ケミカルホールディングス

項目	内容
1.企業情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 業種：製造業</li> <li>● 事業概要：総合化学 素材（石化・炭素・産業ガス）・機能商品・ヘルスケア（医薬・医療サービス）</li> <li>● 事業規模：2017年度売上 3.7兆円</li> </ul>
2.削減目標案	<p>＜Scope 1・2の削減目標と削減に向けた取り組み＞</p> <p>生産拠点での省エネ活動の一層の推進 自家発電所燃料のガス転換や購入電力への切り替え・再生可能エネルギー導入 生産設備のスクラップ&amp;ビルドによる高効率化・GHG低減の視点も加味した工場設備の最適配置</p> <p>＜Scope 3の削減目標と削減に向けた取り組み＞</p> <p>原材料（カテゴリー1）ではサプライヤーと協業し、原料転換、再エネ利用をサプライヤーにも要請。そのためのイノベーション技術支援。 製品の廃棄（カテゴリー12）においては①リサイクル技術・システムの構築による廃棄プラ量の削減・②リサイクル性向上・炭素負荷の低い素材提供拡大等により総量として低減を図る。 製品の使用（カテゴリー11）は製品そのものの燃焼による排出が大部分のため削減の手段が存在せず、目標が立てられなかった。</p>

# 株式会社三菱ケミカルホールディングス

項目	内容															
<p>3.基準年のGHGインベントリ</p> <p>目標設定にあたり、算定のバウンダリを見直したため、当社より別途開示している2017年度実績排出量とは異なる</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Scope 1・2・3の排出量の状況 (2017年度) 対象：グローバル連結（支配力基準）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● SCOPE1 : [tCO2] 8,510,000</li> </ul>														
	<table border="1"> <caption>Scope 1・2・3の排出量の状況 (2017年度)</caption> <thead> <tr> <th>Scope</th> <th>割合</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Scope 1</td> <td>12%</td> </tr> <tr> <td>Scope 2</td> <td>10%</td> </tr> <tr> <td>Scope 3</td> <td>78%</td> </tr> </tbody> </table>	Scope	割合	Scope 1	12%	Scope 2	10%	Scope 3	78%	<ul style="list-style-type: none"> <li>● SCOPE2 : [tCO2] 7,560,000</li> </ul>						
	Scope	割合														
Scope 1	12%															
Scope 2	10%															
Scope 3	78%															
<p>Scope3排出内訳</p> <table border="1"> <caption>Scope3排出内訳</caption> <thead> <tr> <th>Category</th> <th>割合</th> <th>排出量 (千t)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>購入した製品・サービス</td> <td>30%</td> <td>15,750</td> </tr> <tr> <td>販売した製品の使用</td> <td>40%</td> <td>21,590</td> </tr> <tr> <td>販売した製品の廃棄</td> <td>21%</td> <td>11,100</td> </tr> <tr> <td>その他カテゴリー</td> <td>9%</td> <td>4,680</td> </tr> </tbody> </table>	Category	割合	排出量 (千t)	購入した製品・サービス	30%	15,750	販売した製品の使用	40%	21,590	販売した製品の廃棄	21%	11,100	その他カテゴリー	9%	4,680	<ul style="list-style-type: none"> <li>● SCOPE3 : [tCO2] 55,720,000 目標の対象セクター：</li> </ul>
Category	割合	排出量 (千t)														
購入した製品・サービス	30%	15,750														
販売した製品の使用	40%	21,590														
販売した製品の廃棄	21%	11,100														
その他カテゴリー	9%	4,680														

# 株式会社三菱ケミカルホールディングス

項目	内容
4.気候変動によるリスクと機会の分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 【リスク】製品ライフサイクルでのGHG排出の大きな製品は炭素税や規制・風評などで顧客に受け入れられなくなり、事業機会を失うことが懸念される。</li> <li>● 【リスク】製品製造に多量のエネルギーが必須の事業のため、燃料の脱炭素化の動きに乗り遅れると、エネルギーコストの上昇・調達難などで事業競争力が低下する。</li> <li>● 【リスク】自然災害の増大に伴うサプライチェーンの分断が懸念される。</li> <li>● 【機会】GHG削減施策を通して少ない炭素排出で製品が提供できれば、事業機会の創出に繋がる。</li> <li>● 【機会】化学素材の機能・特徴を生かしたGHG削減に貢献する製品・サービスを提供することにより自社外での削減に貢献できる。</li> </ul>
5.削減目標設定の背景・目的・期待する効果など	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 現在2030年に向けたGHG削減の中期目標を策定中。自社排出量の多い素材産業として、またサステナビリティを経営の重要な取り組み課題としている企業として、地球温暖化対策に有効な水準の削減目標を立て、社内外にアピールしたい。</li> <li>● 中期目標を対外的に公表していく中で、野心的削減の取り組みを織り込んでいることをすべてのステークホルダーに訴えることは必須であると考えている。</li> </ul>

# 株式会社三菱ケミカルホールディングス

項目	内容
6.目標設定のプロセスと社内の議論	<ul style="list-style-type: none"> <li>● シナリオ分析を事業部門で実施、温暖化に伴うリスクと機会を適切に把握した上で個々に事業計画に裏打ちされたGHG削減計画を立案する。経営戦略部門にてSBTの要求水準と摺り合わせを行い、事業部門へのフィードバックを繰り返しながら目標設定を行う取り進めが、社内コンセンサスを得る上で重要であることが理解できた。</li> <li>● 目標起案時は経営層の承認プロセスは通常の中期経営計画審議・承認の枠組みを用いる。取締役会での決議事項とすることを確認した。</li> <li>● 野心的な目標設定のためには、現時点でまだ出口の十分に見えていないイノベーションを織り込む必要があり、社内的な合意が非常に取り難い。</li> </ul>
7.今後の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Scope1・2の目標達成のための方策の達成可能性・財務インパクトの評価を行い、SBT認定に相当する目標の設定。</li> <li>● Scope3については事業の特性上、インパクトの大きなカテゴリーにおいて効果的な絶対量削減の方策は現在考え得る限りにおいて描けなかった。実現可能性の高い施策を見出すための更なる検討が必要である。</li> </ul>